京都教育大学環境教育研究年報第27号　65-73（2019）

防災・復興教育についての研究（1）
－岩手県教育委員会の小学校副読本の内容の分析を中心に－

藤岡秀樹 [*1]

A Study of Education for Prevention of Disasters and Reconstruction(1): Focusing on the Contents Analysis of the Subtext for Elementary School Published by Iwate Prefectural Editorial Board

Hideki FUJIOKA

抄　録：岩手県教育委員会が防災・復興教育のための副読本として刊行した『いきる　かかわる　そなえる』の小学校低学年用（１～３年生対象）と高学年用（４～６年生対象）の内容を紹介し，特徴について論じた。低学年用では37項目，高学年用では41項目が取り上げられ，岩手県内の出来事や復興の歩みなどが紹介されていた。「そなえる」の内容は，低学年用と高学年用で共通する内容が多いが，スパイラルに学ぶことを意図していて，高学年用は低学年用に比べて，より深化した内容となっていることを見出した。そして，岩手県教育委員会が進める「いわての復興教育」プログラムの概要について，復興教育の意義，復興教育の推進のポイントを中心に紹介した。

キーワード：防災教育，復興教育，副読本，小学校，岩手県教育委員会

Ⅰ．はじめに

2011年３月11日に東日本大震災が起こってから８年程経過した。被災した東北地方や関東北部でも，復興は見られるものの，地域差は激しい。東京電力福島第１原子力発電所のメルトダウンにおける福島県浜通り地方は，いまだ帰宅困難地域が広範囲にあり，復興の兆しすら伺えない現状である。他方，被災３県を中心に，防災・復興教育の取組も進められている。

本論文では，地震と津波による大きな被災を受けた岩手県の防災・復興教育について，岩手県教育委員会の作成した副読本と復興教育プログラムの概要について紹介する。

Ⅱ．岩手県教育委員会作成の副読本（小学校低学年用）

岩手県教育委員会は，防災・復興教育のための副読本として，2014年５月に，『いきる　かかわる　そなえる』と題する副読本を刊行した。副読本は，小学校低学年用・高学年用・中学校用の３種類から成る。

[*1] 京都教育大学教育学科

2.1. 小学校低学年用副読本の内容

小学校低学年用は64ページから成り，写真を多用しカラフルである。最初のページで「ひょっこりひょうたん島」の写真と歌詞が掲載されている。

「いきる」は9項目,「かかわる」は13項目,「そなえる」は15項目から構成されている。「いきる」の項目は，以下のようになっている。簡潔に補足しながら紹介しよう。

・生き残ったイトヨ－大槌町で魚のイトヨが生き残っていた
・家族のみんなによろこんでもらったよ！－生活科のお手伝い
・「ゆめ先生」がつたえたいこと－被災地で「ゆめ先生」としてスポーツ選手が行った授業
・走れ，かまいしキッチンカー－被災地を巡回する移動販売車
・しぜんとともに－宮古市田老の89歳の女性による自然の厳しさをテーマにした読み聞かせ
・はるかのひまわりロード－阪神大震災の復興で栽培された「はるかのひまわり」
・つらいとき，かなしいとき，どうする？－心と体のリラックス，ストレス解消の方法
・絵をかいてみよう－アートセラピーとしての絵画
・友だちや家族と遊ぼう－友だちや家族と遊ぶ遊び方

「かかわる」の項目は，以下のようになっている。

・（小学校1年生の作文）ありがとうおまわりさん
・思いやりの心－友だち交流－盛岡視覚支援学校小学部児童と釜石小学校児童との交流
・協力し合うって，楽しい－大槌町の小学生児童による入浴施設のボランティア
・「まけないぞう」がつなぐきずな－タオルで作る「まけないぞう」の製作
・かえってきた「いらっしゃいませ」－震災4週間後に再建されたコンビニエンスストア
・（小学3年生の作文）今回の震災で感じたこと
・ひさいした犬をセラピードッグに育てる
・今度は自分たちが－セルビア人による日本を励ます人文字つくり
・「ふるさと科」で町を元気に－大槌町の郷土芸能を採り入れた「ふるさと科」の取組紹介
・四つの教え－昭和三陸津波を経験した荒谷さんの地震に対する4つの教訓
・防潮堤を見て学ぶ－宮古市田老の防潮堤が果たした役割の説明
・津波を乗りこえて－北海道南西沖地震により被災した奥尻島の復興
・「論語」に親しもう－大事なことは「仁」,「論語」を学ぶことの意義を考える

「そなえる」の項目は，以下のようになっている。

・2011年3月11日東日本大震災－東日本大震災の岩手県の被災状況の概説
・岩手の主なさいがい－これまでに岩手で起こった地震，津波，大火，台風，大雨の概説
・地震のしくみとひがい－地震の起きる原因と被害についての解説
・津波のしくみとひがい－津波の起きる原因と被害についての解説
・火山ふん火のしくみとひがい－火山噴火が起きる原因と噴火の被害についての解説
・台風のしくみとひがい－台風の発生原因と被害についての解説

・急な大雨・かみなり・たつまきー雷雲ができる仕組みと大雨・雷・竜巻発生時の注意
・大雪とそのひがいー雪が降る仕組みと大雪の被害についての解説
・放射線をへらす活動たらちね会ーいわき市のNPO法人の放射線除染活動の取組紹介
・みんなで，ぼうさい力を高めようー危険を減らし安全を高める方法の紹介
・きん急地震速ほうー緊急地震速報についての概説
・ショートくん練をやってみようー「ショート訓練」の説明と取り組んでみることを促す
・そのとき，どうする？ー地震が学校で，下校時，家にいる時，外で遊んでいる時に起こったらどう行動するかの発問
・ライフラインって何？ーライフラインの説明と電気・水道・都市ガスの復旧日数の紹介
・家族で地震にそなえましょうー避難場所や集合場所，備えておく物の確認とおうち防災マップづくりの勧め

2.2. 小学校低学年用副読本の特徴

小学校低学年用の副読本は，小学１年から３年までを対象としている。内容は多岐にわたっている。教科書ではないので，全部を取り扱う必要性はないが，地域（沿岸部・内陸部）や児童の実態に応じて指導を展開することになる。岩手県の復興や被災を取り上げた内容だけではなく，隣接の宮城県の児童が書いた作文なども取り上げられている。

「いきる」では，生命の大切さ，心身の健康などが取り上げられている。辛い時や悲しい時に，家族や先生，医師や専門家（スクールカウンセラーなどを想定）に相談することを勧めている。さらに，リラクゼーションについても触れている。また，絵に心理が表れるとして，描きたい絵を書くことも勧めている。

遊ぶことの大切さも述べ，公園や空き地を利用して友だちや家族と遊ぶことを勧めている。特別な遊具が必要でない遊びとして，縄跳び，風船バレーボール，ケンケンずもう，さんぽ、輪投げ，タオル取り，腕立てじゃんけんなどが例示されている。

「しぜんとともに」では，1925年生まれの女性の昭和三陸地震（1933年）の津波体験を取り上げながら，その教訓を活かすことについて触れている。「はるかのひまわりロード」では，1995年の阪神淡路大震災による建物倒壊で犠牲になったはるかさんの家の跡地に咲いたひまわりが，復興のシンボルとして各地で育てられ，陸前高田市でも「はるかのひまわり」が，2012年に咲いたことを扱っている。全国の人々に「はるかのひまわり」が何故受け継がれているのかを，考えさせる発問が記載されている。

「かかわる」は，人の絆や社会参画などの視点で構成されている。「思いやりの心ー友だち交流」では，内陸部の盛岡視覚支援学校と沿岸部の釜石小学校との交流が取り上げられている。岩手県内では，被災の程度が大きかった沿岸部と津波の被害はなく相対的に復興が早かった内陸部との学校間交流が行われてきたので，この教材を使いながら，自分たちの学校での交流を振り返ることができるものである。「「まけないぞう」がつなぐきずな」は，阪神淡路大震災の時に，避難所で生活する人々がタオルで作った象を，岩手県でも作り始めたことを取り上げている。東北地方で作られた象がいったん神戸に集められてから全国に販売されるという。

「ひさいした犬をセラピードッグに育てる」は，国際セラピードッグ協会の取組を紹介している。

避難所に行けず,取り残された犬を見つけて訓練し,セラピードッグとして育てる取組である。「「ふるさと科」で町を元気に」は，沿岸部の大槌町の小・中学校で開設している「ふるさと科」の学習内容を簡潔に紹介している。「ふるさと科」の学習内容の１つである郷土芸能発表会に焦点を当て,自分の住んでいる地域の郷土芸能について調べさせている。教材では,虎舞が挙げられている。

「いきる」とも関連の強い教材としては,「四つの教え」がある。昭和三陸津波を経験した荒谷さんが，子ども達に厳しくしつけた「四つの教え」（地震・津波・赤沼山・戻らない）について，四女の回顧を通して，その意味を考えさせている。「津波てんでんこ」と通ずる言い伝えである。「防潮堤を見て学ぶ」は，宮古市田老の３つの防潮堤が果たした役割を考えさせる教材である。３つの防潮堤の内，１つは崩壊し，18 人の犠牲者を出したが，その原因についても考えさせようとしている（津波警報が出たが停電のため，津波警報が届かなかったことや頑丈な防潮堤があるので津波は来ないと信じ込み，油断があったこと，いったん避難したものの家に探しもので帰ったことなど)。「津波を乗りこえて」は，北海道奥尻町の地震・津波による被害からの復興を取り上げている。自然災害から復興した町を調べさせ，自分の住んでいる町をどんな町にしたいかを考えさせる発問が挙げられている。

「そなえる」は，震災や津波の経験を踏まえた自然災害の理解や防災と安全を中心に構成されている。最初に，東日本大震災の岩手県の被災状況を概説し，次に，これまでに起こった岩手県の主な災害（地震・津波・台風・豪雪・大雨）を紹介している。そして，地震，津波，火山噴火，台風の仕組みと被害について述べている。その内容は，小学校１～３年生にとっては，少し高度なものとなっている。教師がかみ砕いて説明することが求められよう。大雨・雷・竜巻・大雪についても触れ，注意事項が述べられている。

「放射線をへらす活動　たらちねの会」は,福島の母親で組織されているNPO法人「たらちねの会」の活動を紹介しているが，本章の中では少しユニークな内容である。放射線の測定（食べ物・衣服・身体・畑・学校の測定）を紹介し，除染についても触れている。岩手県でも東電福島第１原発メルトダウンによる放射線量の急増が県南部で見られ，除染に膨大な経費と時間がかかったので，時宜にかなっている。しかしながら，放射線は可視化できず，小学校低学年にとっては理解が困難かもしれない。

「みんなで，ぼうさい力を高めよう」では，危険を減らし，安全を高めるための配慮について触れている。２次被害について触れている点は，好ましいものである。「そのとき，どううする？」では,様々な場面で地震が起きたらどの様にすべきか,児童に考えさせる発問が多く含まれている。最初から対処法を示すのではなく，児童に考えさせることは大切である。

「ライフラインって何？」は，電気・水道・都市ガスの復旧日数を，東日本大震災と阪神淡路大震災と比較して提示している。電気の復旧は早いが，水道や都市ガスの復旧はかなり日数がかかることを理解させようとしている。三日間生き延びると助かると言われており，そのための水や食べ物の準備の必要性を述べている。

「いきる」「かかわる」「そなえる」は相互に関連性があり，関連づけて指導することが求められよう。岩手県の場合，沿岸部と内陸部で東日本大震災の被害に差異が見られ，児童だけでなく，教師にも温度差がある。教材研究に関しても，この点を念頭に置くことが必要である。

Ⅲ．岩手県教育委員会作成の副読本（小学校高学年用）

3.1　小学校高学年用副読本の内容

小学校高学年用の副読本は 64 ページから成り，低学年用と同様に写真を多用しカラフルである。最初のページで宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の一節が，岩手大学農学部の農業資料館とモニュメントの写真を背景に記載されている。「いきる」は 11 項目，「かかわる」は 12 項目，「そなえる」は 18 項目から構成されている。

「いきる」の項目は，以下のようになっている。

・三陸鉄道のたたかいー壊滅状態になった三陸鉄道の復旧と再開の様子（２年後，全線開通）
・「もっこ」で弁当配達ー宮古市の小・中学生姉妹が「もっこ」で高台に避難した年寄りに弁当を運ぶ
・夢，勇気を持って一歩踏み出そうーバレーボール選手が宮古市の小学校を訪問し，児童に夢を語る
・20 キロ圏内から来たキティー福島第１原発の警戒区域に残された猫のキティを保護し育てた
・海人の心ー漁師が海の神様に祈り，４年生のひろしが昆布漁に父と行こうと考える
・一年間やりきった入浴支援ー京都の大学を辞めて陸前高田市で入浴支援を１年間やった青年
・みんなのくらしがよくなるためにー大船渡市の中学生が総合的な学習の時間でワカメ養殖を学び，修学旅行先の東京で販売を行った
・呼吸法で心のケアー呼吸筋ストレッチ体操でストレスや不安の解消の仕方についての説明
・「チャレンジデー」に挑戦　陸前高田市－ 21 時間で 15 分以上運動した市民の参加率を自治体間で競う「チャレンジデー」の２年ぶりの復活
・手軽な運動，ストレッチー手軽にできる運動やストレッチの仕方の紹介
・多くの命を救った防災無線ー宮城県南三陸町役場職員が防災無線で避難を呼びかけ殉職した出来事

「かかわる」の項目は，次のようになっている。

・二人二脚二輪ー釜石市の足が不自由な高齢者と視覚障害者の息子が車椅子で親子で助け合って避難した
・（小学校６年生の作文）次の日は倍に笑おう
・強くなってください。そして笑顔でいてくださいー山田北小を助けた「国境なき子どもたち」の活動
・地域のみんなで助け合うー防災会と３つの助け合い（自助・共助・公助）
・遠野に「まごころ」が集まったー遠野市に設立された「まごころネット」の沿岸部でのボランティア・支援活動の紹介
・人々をつないだ歌声ー不来方高校音楽部の合唱での避難所慰問
・まごころを運ぶバスー山梨県のバス会社によるボランティアバスの運行
・町を元気にするために，高校生サミットー釜石市の高校生のサミット
・未来のために　五つの提言ー鍬ヶ崎小児童の地域住民へのインタビューからまとめた提言

・三人の絆－県立高田病院の津波浸水で危機一髪で助かった家族のこと
・高校生が地域にかかわる－宮古水産高校のサケの中骨缶詰やシャキシャキすじめ，海プリンの紹介
・世界がぜんたい幸福にならないうちは－東北農民管弦楽団の活動と宮沢賢治の「農民芸術概論綱要」

「そなえる」の項目は，以下のようになっている。
・2011年３月11日　東日本大震災
・日本の主な災害
・地震のしくみと被害
・台風のしくみと被害
・急な大雨・かみなり・たつ巻
・大雪とその被害
・正確な情報の発信・収集・判断－正確な情報を得ることや的確に判断することの重要性，伝言ダイヤルや伝言板の活用を説明
・緊急地震速報－ゆれが来る前に地震波をキャッチ！－緊急地震速報の仕組みと発令時の素早い対応
・とっさの判断と行動　ぐらっときたら，こうしよう
・防災力を高めよう　ショート訓練のすすめ－教室のチェックと危険の予測，ショート訓練の実施についての解説
・応急手当のしかた－出血，骨折，やけどの手当，人が倒れている時の対処，AEDの使い方
・津波のしくみと災害
・火山噴火のしくみと被害
・そのとき，どうする？
・大きな災害ではライフラインがとまる
・家族会議を開こう－わが家はだいじょうぶ？
・家族といっしょに防災マップをつくろう
・地域の避難訓練に参加しよう－本寺小の取組の紹介と避難先・避難ルートの確認
このように，「そなえる」の項目は，小学校低学年用と重複したものが多い。

3.2　小学校高学年用副読本の特徴

小学校高学年用の副読本は，小学４年から６年までを対象にしている。低学年用は37項目から成っているのに対して，高学年用は41項目から成り，項目数が増加している。体裁は両者とも同様である。

「いきる」では，岩手県の震災後の復興過程を伝える内容が多い。「三陸鉄道のたたかい」では，沿岸部住民の悲願であった三陸鉄道（明治三陸地震の復興策として考えられた）が，85年後に全通したが，東日本大震災で不通となった。しかし，２年間で見事に復旧できたことを時系列的に紹介している。「夢，勇気を持って」は，アスリートが被災地の小学校を訪問し，体を動かすゲー

ムや話し合いを行い，児童に夢を持たせ，将来の希望を叶えるために必要なことを考えさせようとする教材である。

「20キ圏内から来たキティ」は，福島第1原発事故で警戒区域となった地域で，飼い主から見捨てられた猫を育てるという内容で，動物や植物にも人と同様に命があり，命の大切さを考えさせる教材である。「みんなのくらしがよくなるために」は，大船渡市のワカメの養殖を取り上げ，これまで台風や津波で養殖施設がたびたび流されても，それを克服して復興してきた歴史を，ワカメ養殖発祥地の顕彰碑をもとに紹介している。「呼吸法で心のケア」と「手軽な運動，ストレッチ」は，心身のケアの仕方をわかりやすく解説している。

「二人二脚二輪」は，釜石市の障害のある親子（95歳の母は足が不自由で歩けない。64歳の息子は視覚障害）がお互いに助け合いながら，高台に避難したという話である。母が車椅子の上から，視力の弱い息子に方向を指示し，無事避難することができた。障害のある人の震災時の避難方法を考えさせることや協力し合うことの大切さを考えさせることができよう。

「かかわる」の冒頭では，6年生の佐々木陽音さんの作文を載せている。大震災で陽音さんの父が死亡し，祖父母は行方不明で，母と本人だけの二人暮らしとなったが，辛いことや悲しいことがあっても「泣いたら倍に笑おう」と決め，二人で力を合わせて頑張ろうとしている姿が綴られている。数年後，陽音さんが高校に進学して勉学に頑張っていることが，朝日新聞で紹介されている。

「強くなってください。そして笑顔でいてください」は，NPO法人「国境なき子どもたち」（世界の約10か国で子どもを対象に支援活動をしている団体）が，津波で大きな被害を受けた山田北小を訪問し，泥の海になった校庭に土を入れて整地し，体育や遊びに使えるようになったという内容である。表題は「国境なき子どもたち」のドミニク事務局長が，最後のお別れ会の際に発した言葉である。ボランティアを含む海外とのつながりを示す教材である。

県内のつながりとしては，「遠野に「まごころ」が集まった」が挙げられる。内陸部の遠野市に誕生したNPO法人「遠野まごころネット」を取り上げている。遠野市は釜石市と隣接しているので支援が行いやすく，拠点となった。「サンマ隊」（冷凍倉庫から津波で流されて腐ったサンマの片付け）「足湯隊」（湯で足を温めてマッサージしながら悩みや不安の声に耳を傾ける）「分かち合い隊」（避難所で炊事や洗濯などを手伝う）「お茶っこ隊」（仮設住宅の集会所でお茶会を行う）などの取組が見られた。発問として，住んでいる地域ではどんなボランティアがあるか，どんなボランティアをやってみたいかなどが示されている。

「人々をつないだ歌声」は，不来方高校音楽部が被災地を慰問し，合唱を通して避難者の心が癒やされたことを扱っている。「未来のためにー五つの提言」は，鍬ヶ崎小の児童が地域の住民にインタビューし，津波体験を記録に残す取組を扱っている。五つの提言は，①地震が来たら迷わず高台へにげるべし，②命を優先し何があってももどらぬべし，③助け合い人とつながりを大切にするべし，④万一に備え防災グッズを準備しておくべし，⑤未来へ向けて一歩一歩進むべしーである。

「高校生が地域にかかわる」は，宮古水産高校が開発した「サケの中骨缶詰」「シャキシャキすじめ」（スジメは海藻の一種）「海プリン」（宮古の海水から作った塩を使用）を紹介し，地域に貢献することを考えさせようとしている。

「世界がぜんたい幸福にならないうちは」は，2013年に結成された東北農民管弦楽団の演奏を取り上げ，宮沢賢治の考え方と関連づけて紹介している。この楽団の構成員は，農家の人，農協職員，農学部の学生や卒業生，農政職員，獣医，肥料や飼料会社の会社員などである。宮沢賢治の「農民芸術概論綱要」の精神に立っているのが特徴である。岩手県の小・中学校では，教科や総合的な学習の時間で宮沢賢治を取り上げることが多く，児童にとっても関係性を考えるのに適切な教材だと言えよう。

「そなえる」の内容は，概ね低学年用の副読本の内容を発展させたものであると言えよう。低学年用と高学年用で共通の項目（表題）は，「2011年３月11日　東日本大震災」「地震のしくみと被害」「津波のしくみと被害」「火山噴火のしくみと被害」「台風のしくみと被害」「急な大雨・かみなり・たつ巻」「大雪とその被害」「緊急地震速報」「そのとき，どうする？」の９項目である。「そなえる」，つまり防災・減災教育の視点はスパイラルに学習し，深化させる必要があるからである。

他方，低学年用では，「岩手の主な災害」が扱われているのに対して，高学年用では「日本の主な災害」となっている。

「家族会議を開こうーわが家はだいじょうぶ？」では，避難場所や集合場所の確認，家の安全のチェック，家庭で備えておくもののチェック（家庭で準備，１人ひとり準備，便利なものの３つに分類して提示）を扱っている。「家族といっしょに防災マップをつくろう」では，地図をかく，地図を持って町を歩いてみよう，避難場所を決めよう，ランキングをつけようの手順で地域の防災マップを作ることを勧めている。

高学年で取り扱われている内容の記述も，理科の授業では扱わないやや高度の内容が含まれており，教師の指導に際しては，補足が必要となるであろう。

Ⅳ.「いわての復興教育」プログラム

岩手県教育委員会は，2013年２月に『「いわての復興教育」プログラム　改訂版』を刊行した。その概要を紹介しよう。岩手県の復興教育の意義としては，「震災津波の体験から学んだことを生かす」と「どんな時でも，生き抜くための力を身に付ける」の２点を挙げている。

岩手県の復興教育の推進のポイントとして，目的では，「郷土を愛し，その復興・発展を支える人材の育成（復興・発展を支えるひとづくり）」が示されている。

教育的価値では，「Ａ生命や心」「Ｂ人や地域」「Ｃ防災や安全」の３つを取り上げている。Ａとしては，震災津波時や震災津波後の生活を踏まえた，命の大切さや自然との共存に関すること，自分の存在を認め，夢や希望からいきる価値を見出すなど，自らのあり方，生き方に関すること，震災津波後の心のサポートに関すること，体力の維持・増進など，身体の健康に関することが挙げられている。Ｂとしては，家族の絆や家庭の一員としての喜びに関すること，互いに助け合ったり，思いを寄せたりする仲間や地域の方々に関すること，震災津波後の支援活動における県内外や各国間とのつながり（絆）に関すること，地域コミュニティ活性化への参画に関することが挙げられている。Ｃとしては，震災津波体験（情報・ライフラインの途絶等）や科学的知見・防災リテラシーを踏まえた防災に関すること，災害時の行動に結び付く判断に関すること，災害を想定した日ごろの備えに関すること，災害時を生き抜く知恵と衣食住の技能に関することが挙げ

られている。

これらを具現化したものが，副読本『いきる　かかわる　そなえる』である。「いきる」の具体項目は７項目,「かかわる」の具体項目は７項目,「そなえる」の具体項目は７項目から成っている。③教育活動の組み立て方では，体験から学ぶ，組織的・有機的指導，各校の実情に応じた内容の３点を挙げている。

復興教育プログラムは，教科指導のみならず，防災教育，キャリア教育，道徳教育，ボランティア教育，地域との交流，学校間交流，心のサポートと多岐にわたって実施されることになり，各校の特色や地域の特性に応じてメリハリを付けたカリキュラムとなる。副読本はあくまでも指導のための１つの教材であり，教師が開発した地域教材を積極的に用いることが肝要であろう。学校経営にも反映させることは，言うまでもないだろう。

筆者は，1986 年４月から 1999 年７月まで岩手大学に勤務し，岩手の各地の学校を研究や学生指導などで訪問した。東日本大震災の岩手県の被災地の印象は心に強く残っており，防災教育の必要性も痛感している。震災から８年程経過したが，まだ完全な復興には至っていない。速やかな復興が行われることを期待していることを最後のまとめに代えたい。

文　献

岩手県教育委員会（2013）「いわての復興教育」プログラム　改訂版　岩手県教育委員会事務局

岩手県教育委員会（2014a）いきる　かかわる　そなえる　小学校低学年用　岩手県教育委員会事務局

岩手県教育委員会（2014b）いきる　かかわる　そなえる　小学校高学年用　岩手県教育委員会事務局